

昭島礼拝 2020/10/4

聖書：ヨナ 1:1-3

主題：主の御顔

賛美：

みなさん、おはようございます。10月に入りました。今日から11月末までの間、旧約聖書のヨナ書を開きたいと思います。今年はいろいろとイレギュラー続きなので、何回シリーズになるかわかりませんが、アドベントに向かうまでの間、一緒にヨナ書を読みたいと思います。

ヨナ書は旧約聖書の中の預言書のひとつです。4章までしかなく、1章当たりが10節ほどしかないので、すぐ読むことができます。また一つの物語として話が簡潔にまとまっていてとても読みやすいです。旧約聖書には当時のイスラエルの様子や文化などが分からないと難しい書物もありますが、ヨナ書はそのような知識がなくても、よく分かるお話になっていると思います。教会学校でも、子どもたちが大好きなお話のひとつなのではないかなと思います。そんなヨナ書ですが、メッセージの内容はとても奥深く、大人もじっくりと考えさせられる内容になっています。読書が苦手な私でもすぐに読むことができ、そして深く考えさせられるということで、素晴らしい書物ではないかと思えます。もっと言えば、旧約聖書の神様のイメージは怖い神様、厳格な神様という印象を抱きやすいですが、ヨナ書の神様はあわれみ深く、優しい神様なんです。それもまたこの物語を読みやすくさせているかなとも思います。

先ほど、ヨナ書は特にイスラエルの文化的な知識が無くても、よくわかる内容になっていますと言いましたが、少しだけヨナ書の時代背景を説明させてい

ただきます。まず主人公である預言者ヨナについてですが、II列王記14:25にアミタイの子ヨナという名前が出てきます。II列王記14:25はイスラエルの王ヤロブアム2世について書かれている箇所になります。そこでどのようにヨナについて触れているかという、神様がヨナを通して預言した通りに行われたということです。ですから、ヤロブアム2世の時代か、それよりも前にヨナが預言者として活動していたことが分かります。聖書にはこのヨナ書以外にほとんど登場しないヨナですが、新約聖書においてはイエス様もヨナについて言及しています。ですからイスラエルの間ではそこそこ有名なのかもしれません。

ヤロブアム2世の時代は北イスラエル王国の末期目前という時期です。少し前にアハブというとんでもない王様がいて、北イスラエル王国は神様から離れて歩んでいました。そのころ、預言者エリヤとエリシャが遣わされて、北イスラエルの人々になんとか神様を信じて歩むように教えます。ヨナは同じくらいか、その少しあとに活動しました。そしてそのあと、神様は北イスラエル王国を憐れんでくださって、ヤロブアム2世の時代には少し領土が広がり、国内は割と安定した時代でした。それはヤロブアム2世が神様にちゃんと従ったからではなく、ヤロブアム2世が神様を完全に無視して歩んでいたにもかかわらず、神様はイスラエルの人々を憐れんで助けてくださったということです。このことはヨナ書全体のメッセージとも一致します。北イスラエル王国内はそのような時代なのですが、外国の様子としては、世界史では新アッシリア帝国が全盛期を迎える時代です。領土が一番広がっていた時代です。イスラエルの国にもアッシリア帝国の様子が伝えられていました。そしてアッシリアがイスラエルを狙っている、といううわさも聞こえてきていました。ですからイスラエルから見れば、アッシリアは今にも攻めてきそうな敵の国というイメージになります。

このような時代背景の中、神様はヨナに語られました。それは北イスラエル

の人々に、神様とはどのようなお方かを伝えるためでもありましたが、ヨナに託されたのは、アッシリアに向けてのメッセージでした。ヨナ 1:2 で神様はヨナに「ニネベに行って語りなさい。」と告げます。ニネベというのは、アッシリア帝国の首都です。神様はヨナに、自分たちを攻めてくるかもしれない敵の国に、神様のメッセージを届けに行きなさいと言われたのです。それを聞いてヨナはどうしたでしょうか。当然、行きたくないと思いました。ヨナは神様に「行きたくない」と言ったのでしょうか。もしかしたら言ったのかもしれませんがね。あとでヨナはそのことを神様に訴えています。しかしその一方で神様と向き合おうとしなかったことも事実のようです。1:3 にはこのように書かれています。「しかし、ヨナは立って、主の御顔を避けてタルシシュへ逃れようとした。彼はヤッファに下り、タルシシュ行き船を見つけると、船賃を払ってそれに乗り込み、主の御顔を避けて、人々と一緒にタルシシュへ行こうとした。」ここに「主の御顔を避け」という言葉が 2 回出てきます。ヨナの行動を印象付ける言葉です。「主の御顔を避けて」タルシシュへ行こうとしました。タルシシュという町の名前は聖書にいくつか出てくるのですが、正確な場所はわかっていません。スペインのほうかもしれないという人もいますが、トルコのほうかもしれないという人もいます。いずれにしても、ヨナはニネベではない場所へ、神様の言葉とは違う方向、なるべく関わらない方向へ行こうとしました。

今日はこの「主の御顔を避けて」という言葉に注目したいと思います。旧約聖書はイスラエル人たちの言語であるヘブル語で書かれています。ヘブル語の独特な表現で、「顔の前」で「真正面」とか、「だれだれの方へ」という意味になります。体を使った表現ですね。人の顔は正面を向いて作られていますから、顔の前ということは正面ということです。日本語の場合は、顔ではなく、目を使いますね。目の前という言い方をします。日本語の場合でも、どこかへ旅行に行ったときなど、目的地は目の前とか言います。同じような使い方ヘブル

語の場合は顔を使います。顔の前です。

この顔の前に来るということは、つまりその人と向き合うことになります。正面から向かい合うことになりすね。顔つき合わせて、顔と顔を合わせてという形になります。聖書が教えている神様との良い関係というのは、この顔と顔を合わせて、正面から神様と向かい合うことです。先ほどの日本語で言えば、目を合わせてということですね。目を合わせたり、顔を合わせたりすると、そのまま相手を無視することはできないですね。「やあ。こんにちは。お元気ですか。」ということになります。神様と向き合えば、神様と「やあ。こんにちは。お元気ですか。」という会話になります。教会でもよく神様の前に出る。主の御前に今、行こうとか、そういう言い方をします。これは要するに、神様と顔と顔を合わせて、会話をしようということです。神様は私たちと関係を持つこと、会話を楽しむこと、私たちに祝福を与えることを望んでおられます。だから神様と正面から向き合うことはとても大事です。モーセは神様と顔と顔を合わせて語り合いました。その時、神様の栄光の光を受けて、モーセの顔は光り輝いていたと言います。イザヤ 40:10 には、「見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の御前にある。」と書かれています。神様の祝福は神様の前から出てきます。このイザヤ書の言葉の主の御前にあるという言葉はヘブル語ですと、「主の顔の前」となっています。神様と向き合うとき、私たちは神様と会話をします。私たちは神様を知り、神様も私たちのことを知って下さり、神様からの様々な良いものを受け取ります。

逆に神様と向き合わないという選択はどうでしょう。聖書では、すべての祝福である神様の御前から去ること、神様から離れることは命から離れることと同じであると教えます。祝福であり、いのちの源である神様から離れて生きていくことはできません。ではなぜ私たちは神様から離れようと思ってしまうのでしょうか。ただ束縛されたくないと思うからかもしれません。でも神様は私た

ちに自由を与えてくださっています。ただ関係を持ちたいだけです。もしかしたら私たちが神様から離れてしまうのは、私たちのうちに何かやましいことがあるからかもしれません。神様が「これがいいよ。こうしたほうがいいよ。」と仰っていることを、うっとうしいと感じたり、ヨナの場合は「それが良いとは思えない」と思ったのでしょう。そしてそのことについて神様とじっくりと向き合って会話することすら面倒くさい。だから神様との会話を避けよう、神様と向き合うことはやめておこう。でも代わりにタルシシュの町に行って、そこで神様の福音を語っていれば、それは神様にとっても良いことをしていることになるでしょ？ そう思ったのかもしれませんが。神様のために良いことをしようという体面で、神様と向き合うことを避ける。ヨナはなんとも高度なことをしているのです。しかしそれは神様が望んでおられることではありません。神様はどうあっても、ヨナと対話することを望んでおられます。それがこの後のお話につながっていきます。

主の御顔に向き合うか、向き合わないか、それは神様から私たちへの投げかけです。別に叱られると決まっているわけではありません。たとえ神様が私たちを叱ったとしても、私たちに愛してのことです。私たちを愛し、祝福を与えたいので、親が子どもを叱るように叱るのです。神様の目的は私たちと面と向かって、「あなたを愛している」と伝えることです。ぜひ、私たちは神様と向き合いましょう。正面切って、腹を割って話し合いたいと思います。その中で私たちはおおきな神様の愛、臨在を感じると思います。実はこのヨナ書 1:3 は、英語の聖書を読みますと、「ヨナは神様の臨在を避けて **But Jonah rose to flee to Tarshish from the presence of the LORD. (ESV)**」という訳になっています。神様の顔の前に立たない＝神様の臨在から離れるということです。神様の御顔を避けることは、神様の臨在から離れようとするということです。神様の御顔の前に立つことは、神様の臨在のうちに立とうとするということです。ぜひいつも神様の御顔の前にいたいものです。